
僕と天使とアイツと彼女

優彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と天使とアイツと彼女

【Nコード】

N9877A

【作者名】

優彩

【あらすじ】

すべての記憶を失ってしまったある男の魂が、交通事故に遭ったある少年の身体に移ることからすべては始まる。主人公と魂が入れ替わった少年には、自分のことを天使だと言い張る少女の幽霊がとり憑いていて……。すべてが謎のなか物語は始まり、次第に登場人物たちの過去や正体が明かされていく。

第一話「光」

重いまぶたをゆっくり開くと、光が差し込んできた。なんだかもう、何十日、何時間と長時間眠っていたみたいに感じる。それに、体のあちこちが痛い。頭がぼーっとして、何がなんだかわからない。右手を誰かに握り締められているような気がして、ふと視線を横に移す。俺が横になっているベッドに、上半身だけ覆いかぶさる形で眠っている、誰かの姿が目に入った。その人が誰なのか俺は知らない。

数秒間、俺はぼーっと、その光景を眺めていた。つけっ放しのテレビをぼんやり眺めるような感覚に似ている。現実感がまるでない。しばらくして、横で寝ていた誰かはゆっくり起き上がり、俺のほうを見ると一瞬驚いたような顔をした。だが、それはすぐに安堵の表情へと変わった。目に涙を浮かべながら、何度も何度も「よかった」とその人は言った。そのとき俺は、頭の片隅で（この人は俺の母親なんだろうな）と、人事のように考えていた。

そうして、俺の母親らしき人物は「よかったよかった」と、何度も言った後、大慌てで医者を呼びに行った。一人残された俺は、「医者」という言葉を聞いて、ようやくここが病院だということに気づく。

医者はすぐにやってきた。

「お母さん、意識が戻ったからもう大丈夫ですよ」

医者は母親に向かってそう言った。母親はその言葉を聞いて、さきほどよりも安心したようだった。だが、俺はそれに反して、今、自分の身に起きていることが全く、理解できないでいた。まるで、人事のように感じられて仕方がない。

「あの……。どうしちゃったんですか？ 俺？」

自分の声のはずなのに、初めて聞いたような気がした。

「君はおととい、事故に遭ったんだよ。何も覚えてない？」

医者が困惑した様子で言った。母親のほうは、さっきまでの安堵感がうそのように、黙って心配そうに俺の顔を見つめている。

(……事故？ いったい何のことだ？ というか俺は誰だ？ ……ダメだ)

思い出そうとしても、何も思い出せない。

「すいません。なんか今、すぐ頭の中混乱してて……」

「いいんだよ。別に無理して思い出そうとしなくても。今は意識が戻ったばかりで、一時的に忘れてるだけだろうから。こういうことは別に珍しいことじゃないんだ」

医者は俺と母親を安心させるために、穏やかな口調でそう言った。『珍しいことじゃない……』医者がとっさに付け足したような言い方をしたのが、引くかかる。この場合は、たぶん逆だ。俺は今、普通じゃありえないような状態なんだろう。現にこの医者は、平静を装ってはいるが、動揺しているのが俺には分かった。……でも、どうしてもわからないことが一つある。それを今、このタイミングで訊いてしまったのかどうか、俺は迷っていた。きっと、今以上に母親や医者を動揺させてしまうのが、目に見えていたからだ。

「あの……」俺は声を発した。今、訊いておかなければいけない。そう思った。

「俺はいつたい、誰なんですか？」

第二話「天使」

俺の怪我は、そうたいした怪我ではなかったらしく、医者からは二週間もすれば、すぐに退院できると言われた。だが、なぜ自分の名前も思い出せないほどの酷い記憶喪失なのか？それに、たいして強く頭を打ったわけでもないのに、二日も意識が戻らなかったことは、説明できないとのことだった。

俺はなぜだか、いまいちピンとこない。それどころか相変わらず、何か違和感を覚え続けている。まるで自分が自分ではないような、そんな変な感覚なのである。

『小宮山亮』

これが俺の名前だと教えられた。自分の名前を聞いても、何も思い出すことはなかった。

なんだか、何も思い出せない自分に苛ついてきた。いくつもの疑問が、頭の中を掻き乱す。なぜ、何も思い出せないんだ？その前に、なぜ何も覚えていないんだ？……いや、ちよつと待て。俺の脳裏に一つの疑惑が生じた。

俺は本当に『小宮山亮』という人間なのだろうか？

そうではない可能性も十分あるような気がしてきた。そういえば、さっきから感じている、この何とも言えない違和感はいったい何だ？

いつの間にか日が暮れていた。あの後、医者が説明してくれたことを元に、いろいろ考えてはみたものの……。余計に頭が混乱するばかりだった。

母親は、息子が記憶を完全に失ってしまったという事実が受け入れられないといった面持ちで、病室を飛び出して行ってしまった。よっぽど、シヨックだったのだろう。だが、一番シヨックなのは、本人であるこの俺だ。

ベッドの上で一人、孤独に考えていても埒はあきそうにない。ち

よつと気分転換でもしようと、俺はベットからおりてみる。病室の窓に近づき、外を見てみると、病院の庭一面にイルミネーションが施されている。窓を開けると、どこからかお決まりのクリスマスソングが聞こえてくる。

「そうか。今日はクリスマスか」

俺は独り言をつぶやくと、窓を閉め、ベットに戻ろうと思い、後ろを振り返ろうとした。そのとき――

さきほどまで感じていなかった、誰かの気配を感じていた。この気配は、生きている人間のソレとはだいぶ違っていた。そもそも部屋に入ってきたのが人間なら、ドアの音で気づくはずだ。部屋の隅っこに、誰かいるような気がして、ゆっくり後ろを振り返る。

振り返るとそこには、髪の高い、白いワンピースを着た、十二、三歳くらいの女の子が立っていた。真冬だというのに、白いノースリーブのワンピース。どう考えても、普通の入院患者には見えない。ましてや、誰かの見舞いに来た人間とも思えない。

（もしかして、幽霊？）というか、もしかしなくても、おそらくそうだろう。だが俺は、不思議と恐怖は感じなかった。少女は、じつと俺のほうを見ている。恐怖は感じてないはずなのに、なぜか金縛りに遭ったかのようにその場から一ミリも動けない。

《私は天使……》

彼女は微笑みながらそう答えた。……いや、答えた？俺は口に出して言うてはいないのに、答えが返ってきたことに驚いた。しかもその少女も口に出して答えてはいない。

（これは何だ？ 心で会話してるのか？）俺の問いかけに、少女は何も答えない。

ただでさえ混乱しているというのに、それに追い討ちをかけるようにして、また非現実的なことが身に起きている。全く、わけがわからない。今起きていることは、はたして現実なのだろうか。

（いや、もっと冷静に考えてみよう。俺は幻覚が見えているんだ。そしてこの声は幻聴だ。そうだ。そうに決まっている。俺は今朝、

意識が戻ったばかりで、頭が混乱しているんだ）などと、俺は自分に言い聞かせて、落ち着こうと必死になっていた。

『何ひとりでうだうだ考えてんの？』

今度は彼女の口からはつきりと、そう聞こえた。俺は何がなんだかわからず、部屋の隅にいる少女の目を見つめたまま、呆然とその場に立ち尽くしているだけだった。

ドアのノックで、俺は我に返る。返事をする、ドアが開いて女の看護師が夕食を持って入ってきた。その看護師は、俺の不自然な立ち位置に多少、疑問をもった様子で、「ど、どうかしました？」と、ぎこちない笑みを浮かべつつ、食事をベッドの上にある台に運びながらそう言った。

「いや、なんでもないです」

テンション低めに、そう言うのがやっとだった俺は、ひとまずベッドへと戻り、夕食をとることにした。

病室内を見渡すと、いつの間にかあの少女の姿は消えていた。気配ももう感じない。やはりあれば、幻覚、幻聴だったのだろうか。

俺は気を取り直して、食事に箸をつけた。味はまずくもなければ、おいしくもないといった感じだ。まあ、病院食ってやつは、大体こんなもんだろうななどと思いながら、一人黙々と箸を進める。

『君、ニンジン嫌いなのか？』

その言葉に俺は絶句した。さっきのあの少女が俺の顔を横から覗き込んでいる。

（な、な、な、なっ、おまえ、いつからここに？）

『いつからって、最初からここにいたけど』

最初から？ そんなばかな！

確かに、今まで気配は消えていたはずだったのに。いつの間にか、ちゃっかり俺の隣に存在している。

『ねえ、ニンジン嫌いなのか？』

動揺している俺のことなんかお構いなしに、少女は素朴な疑問を一方的に投げかけてくる。無意識のうちに除けられていたニンジンの

山が目に入る。少女はまっすぐ俺のほうを向いている。

「……知らない」

突然、何かあきらめがついたかのように、俺はそう言って、ゆっくりと箸を下ろす。

『えっ?』少女は、俺の発した予想外の一言に、意味がわからないというような顔をしている。そんな彼女を横目に、俺はニンジンの山に視線を下ろしたまま、あまり抑揚のない声で一人つぶやくように語りだした。

「俺は、自分が誰なのかわからないんだ。目が覚めたら、病院のベッドの上にいて、事故に遭ったらしいけど、そんなの全く、記憶にないし、小宮山亮って人間らしいけど、なんか違う気がするんだよね。俺は小宮山亮じゃなくて、別の、それ以外の、別の誰かなんだと思う……」

そこまで言って、俺は一瞬、口ごもる。同時に、幽霊相手に何を言っているのだろうと、ふと思う。

「だから俺が、ニンジン嫌いとかどうかなんて、知らないんだ」

ニンジンの山から少女のほうへ顔を向けながら、俺は最後に結論を付け加える。自分でそう言っておきながら、自分自身のことなのにまるで、人事のような言い方をしたのが少しおかしかった。

少女はというと、神妙な顔つきで黙って俺の話を聞いていた。俺が話し終えたのがわかると、少女は俺に何と言っているのかかわからない様子で、必死で俺に掛ける言葉を探しているようだった。

(こいつ幽霊のくせにいちちょ前に、人に気を遣っている) まあ、幽霊っていうのは、元は普通の人間なのだからあたりまえと言えばあたりまえのことなのだが――。

『亮はニンジン嫌いじゃなかったから、きっと君がニンジン嫌いなんだよ』

彼女の口からとっさに出た言葉がこれだった。俺には、わざと明るく言ったように感じられた。

(そうか。俺はニンジンが嫌いなのか) 気がつく、俺はまた視線

をニンジンのほうへ向けていた。俺がニンジンが好きか嫌いかなんて、正直どうでもよかった。だが、食べ物が好き嫌い一つ、自身身に関する事柄を覚えていない自分が虚しかった。

「それよりおまえ、なんで亮のこと知ってんの？」

『え？』

俺が突然そんな風に質問したのに驚いたのか、少女はきょとんと目を丸くしている。

「おまえ、俺のことは知らないんだろ？　なのに何で亮のことは知ってるのかなあって、思ったんだけど……」

横にいる少女の顔をチラ見してみる。なぜだか知らないが、若干うろたえているように見える。

『えっ、えっと……それは……』

わからなくて答えられないのか、わかつてはいるが答えたくないだけなのか、どちらか知らないが、まあ、言いたくないのなら無理に答える必要などない。今すぐにその疑問が解けなくても、なんら困ることはない。ほかにわからないことが多すぎるので、それだけわかっての意味がないのだ。どちらにしろ、あとでこの謎も解けることだろう。

うろたえる少女を見かねて、質問を変えてみる。

「名前は？　おまえ名前はなんていうの？」

『はっ、ハルカ』

「そっか。ハルカか。それでハルカは天使なんだよね？」

ハルカと名乗る自称天使は、黙ってうなづく。

第三話「正体不明」

まだあたりは薄暗い。時計を見ると5時半だ。俺はほとんど眠ることができずにそのまま朝を迎えてしまったようだ。あまりにも非現実的なことが身におきてしまったからなのか、二日間も眠っていたせいなのか、そのわけは定かではなかったが、とにかく昨夜は、眠気に襲われることがなかった。

しかし、どうやら気がつかないうちに浅い眠りにおちていたらしく、目が覚めると朝を迎えていたというわけだ。そういえば何か夢を見ていたような気もするのだが、目が覚めた瞬間にそんなことは全部、忘れ去ってしまっている。

目が覚めてからしばらくは、天井をぼんやりと眺めていた。ふいにあたりを見回すが、ハルカの姿は見えない。だが、そんなことを特に気にもしないまま、ベッドから降り、すぐ横の洗面台の前に立ってみる。

俺は、生まれて初めて『小宮山亮』と対面した。鏡に映る若い男の顔は、知らない人間のものだった。

「はあゝ」

大きなため息をついて、とりあえず顔を洗った。タオルで洗い終わった顔の水気をふき取り、また鏡に目を移す。格好いいとも悪いとも言えない、いかにも人のよさそうな普通の顔をした男を前にして、俺は思った。

（これが、これが現実……）

一瞬、やはり全部夢かもしれないと思い、顔をつねってみることにした。（痛い。やっぱり痛い）夢ではないということが、地味に証明された瞬間だった。

「ハルカ。やっぱりこれが現実なんだな」

『そうみたいだね』突然俺の前に姿を現したハルカは、あっさりとそう答えた。俺はもう特に驚きもしない。おそらく彼女は、姿が見

えていなくても、ずっと亮（＝俺）のそばにいるのだろう。今まで
もこれからずっと。

「なんか俺、今になってやっと実感わいてきた……」

話は昨日の夜に遡る。あの後、ハルカにこの状況をわかる範囲で
説明してもらった。

まず一つ目、「俺は『小宮山亮』ではない」ということ。ハルカ
の話によると亮は、誰かを助けようとして代わりに自分が事故に遭
ってしまったらしい。まあ、それ以前に『小宮山亮』という人間は
大変お人好しな性格の持ち主らしく、極端な話、募金箱をみつけれ
ると必ず募金してしまうような人間で、とにかく、困っている人を見
ると放ってはおけないという典型的なお人好しタイプの人間なのら
しい。

この話を簡単にまとめると、亮が事故に遭ったときに、俺の魂（
今、亮の身体に入り込んでいる意識＝俺）が、何らかの理由がきつ
かけで『小宮山亮』の身体に入り込んでしまったということ。

二つ目にそうだとしたら「俺はこの誰なのか？」という話。

ハルカは、そこまで具体的にはわからないと言い、こう話を続け
た。

『もしかしたら君は、死んだのかもしれない。それとも、今もどこ
かで生きていて、亮とお互いの魂（＝中身）が入れ替わっただけな
のかもしれない。どっちにしても君は、何らかの理由で死にかけた
んだろうね』

そんなことを言われて、手放しで納得するわけにもいかなかったの
はもちろんだが、またそれとは別の疑問がふと浮かんだ。

もし、ハルカの言うことが真実だとしたなら『小宮山亮』の魂は、
いったいどこに行ってしまったのか？ まさかとは思うが、俺の代
わりに死んでしまったとでもいうのだろうか？ 俺は、永遠にこの
ままで、『小宮山亮』として一生、生きていかなければならないの
か？

考えれば考えるほど、わけがわからなくなる。俺は脳ミソをフル

回転して、考えられるだけのことは考えこんだが、答えなんかわかるはずもない。

まるで、解き方がわからない数学の問題を自力でなんとか解いてみようとして試みている気分だ。俺は、とりあえずその問題を後回しにすることにした。

こんな非現実的なことが自分の身に起きているということに、俺は信じられない気持ちでいっぱいだった。だが、信じないわけにもいかない。今の俺の状況は、とにかく普通ではないはずだ。天使だか幽霊だかの得体の知れない人物(?)の話にも耳を傾けて、自分なりに推測するしかないのだ。

そんな俺に、ハルカはこうも言った。

『今はまだ詳しいことはわからないけれど、君がこれから亮としての記憶と、君自身の記憶を少しずつ思い出すことができれば、何かわかるかもしれない。それに君の身体がまだどこかで生きていて、亮と魂が入れ替わってしまったただけだとしたら、君はいつか、元の身体に戻るかもしれない』と。

「ま、あくまでも可能性の話だな」

ふと我に返ると俺は、鏡に映るアイツの顔をまじまじと見つめながら独り言を呟いていた。どうやら、昨日、ハルカが言っていたことを一つ一つ頭の中で整理していた俺は、『小宮山亮』の顔をじっと見つめていたままだったらしい。

『君って、もしかしてナルシスト?』

さっきからずっと俺の様子を伺っていたであろう、ハルカが的確なツッコミをいれた。横に目を向けると、ハルカがベッドに座って俺を凝視している。一瞬、いつからそこにいて俺の様子をじっと見ていたのかが気になったが、その答えはもうわかっている。最初からずっとここにいたのだ。

『君さっきから、自分の顔ずっと見てるんだもん。さすがにちょっとキモいよ』少々、引き気味で少女はそう言った。

(俺がナルシストだと?) 心外だと俺は思った。この顔は亮のもの

だ。俺のものではない。他人の顔を見つめているのに、ナルシスト呼ばわりされるなんて変な話だ。

「バカかおまえ。この顔は俺のじゃねえんだよ。ナルシストなわけないだろ」と、俺ナルシスト説を即座に否定する。

『だって、君、自分のこと何も知らないっていうからさあ。もしかしたらそうなのかなって、ちょっと思っただけ』

バカ呼ばわりしたのが気に障ったのか、なんだか少し、ふてくされたような態度でハルカはそう言うのと、俺から目線を外して下を向いた。俺はあえてハルカに何も言わない。

そんなことよりも気になることがある。

——ハルカはいったい何者なのか？　ということだ。

最初にハルカが現れたとき、ハルカは自分のことを天使だと言った。しかし、俺の知る限りの天使像とこいつは少しかけ離れている気がしてならない。羽なんか生えていないし、輪っからしきものも見当たらない。そもそも天使という存在が、この世に実在するものなのだろうか。仮にハルカが本物の天使だとしたなら、この状況をすべて把握していてもおかしくはないはずだ。だがこいつは、俺のことは知らないと言う。ということは、やはりハルカは天使ではないのだろう。おそらく、ただの幽霊だ。

俺のことは何も知らないと言っておきながら、亮のことはよく知っているようだったから、亮に取り憑いていた浮遊霊ってところか？

『何？　こんどは人の顔じーつと見て。何か言いたいことでもあるの？』

「あっ、いや……」何もないと言おうとして、何もないことはないなどと思い直す。むしろ訊きたいことは山ほどある。その中でも今、一番気になることを意を決して訊いてみることにした。

「いや、おまえってやつぱりその……ゆ——」（幽霊なのか？）そう訊こうとしたとき、俺の言葉は何者かによって遮られた。

ノックもなしに静かにゆっくりとドアが開いたかと思うと、誰かの姿がそこにあった。振り返ると、昨日の看護師とはまた違う看護

師の姿。四十代のベテラン看護師だと思われる彼女は、不自然な立ち位置にいる俺をじっと見つめる。

「誰もいないわよねえ？」

「えっ？ いっ、いるわけないじゃないですか。ハハハ」

俺はとっさにごまかそうとする。そのあとすぐに「独り言ですよ。独り言」と、付け足してみた。すると彼女は「そう。誰かと話してるみたいだったから、ちょっと気になったんだけど、私の勘違いだったよね」と、病室を見渡しながらい、それが言い終わると、また俺のほうに視線を戻した。俺のことを訝しがっているのは、明確だ。

だが、ここで素直にハルカのことを話しても信じてはもらえないだろう。いったい誰がこんな非現実的なことを信じるというのだ？

俺が逆の立場だったなら絶対に信じない。人間は基本的に目に見えるもの、耳に聞こえるものなど自分の五感で触れられるものしか信じないはずだ。「ハルカという自分のことを天使だと言い張る幽霊と話していた」なんて言えるわけがないし、ましてや、「俺が『小宮山亮』という人間ではない」などと話したところで、信じてもらえる確立は限りなくゼロに近いだろう。

彼女は何か言いたそうな顔をしている。何を訊かれるのだろうと内心ひやひやしている俺。

「それにしても、朝、早いわね。まだ寝ててもいい時間なのに」

（何を言い出すのかと思えば、なんだそんなことか）何か訊かれてもうまくごまかす自信がなかった俺は、ホッと胸を撫で下ろした。

第四話「退院」(前書き)

今のところあまり話が進んでないので、意味不明だと思いますが、
やっと重要キャラの一人が出てきます。

第四話「退院」

それから、長いような短いような入院中の二週間は、あつという間に過ぎ去っていった。相変わらず、俺は自分自身が誰なのかわかるはずもなく、めでたく退院の日を迎えている。

窓から差し込んでくる光がなんだかやけに心地よい。

「亮、帰る支度できた？」

病室で一人、荷物の整理をしていた俺に話しかけてきたのは、亮の母親だ。

「うん。ちょうど今終わったところ」

俺はバッグのファスナーを閉じながら言った。

「そう。じゃあお母さん、退院の手続きとかいろいろあるから、先に下に行って待ってて」

「うん。わかった」

最初ほどではないが、やはり母親は、今でも記憶を失ってしまった息子のことを受け入れられないのだろう。必要最低限の会話をし終えると彼女は俺を一人病室に残し、そそくさとその場を去って行った。

母親は今まで、入院生活に必要なものを持ってきてくれたり、亮の思い出がたくさん写っているアルバムを持ってきてくれたりして、それなりに俺に気を遣ってくれているのがよくわかった。まあ、母親の行動としては当たり前なことなのかもしれないが……。

「さて、そろそろ行きますか」

俺は独り言を呟くと、勢いよくバッグを持ち上げて肩に背負った。亮の母親に言われたとおり、一階の待合室に行って待ってしようと思ったのだ。そのまま、入り口のところまで歩き終わると、二週間世話になったこの病室をもう一度、見渡してみる。もちろんハルカの姿はどこにもない。一応、確認してみたただけだ。

確認を終え、再び前を向いて、引き戸の取っ手に手を掛ける。ドアを開いて病室から一步踏み出す。

俺（＝亮の身体）は、事故ったにしては奇跡的にかすり傷程度の怪我で済んだので、本来ならわざわざ入院する必要もないのだが、なぜか二日も意識が戻らず、おまけに酷い記憶喪失ときている。そうくれば医者は放ってはおかない。二週間かけてさまざまな検査をし、記憶喪失の原因を探ったが、結局、はっきりとした原因はわからずじまいだった。

「なぜですかね？ 脳には何の異常もみられないのに」と、医者も不思議がっていた。

そして終いには「心理的なことが原因なのかもしれない」などと言出し、カウンセリングのようなことも無理やり受けさせられたが、もちろん何の効果もなかったことは言うまでもない。

そんなことを思い返していると、いつの間にか待合室に着いていた。あたりを見渡すとすぐに母親の姿を見つけることができた。どうやら、退院の手続きとやらは、とっくに終わっていたらしい。

お世話になった医者や看護師たちに見送られ、母親と一緒にタクシーで家に帰ることになった。

タクシーに乗り込むと、母親は運転手に行き先を告げた。もちろん、その場所がどこなのか俺は知る由もない。その後、俺と母親はほとんど会話もなく、運転手も特に話しかけてこなかったので、車内はラジオの音だけが響いていた。

俺は窓の外ばかり見ていた。見慣れない景色が続いている。これからの生活は不安だ。『小宮山亮』としての日々。俺という人間の正体。謎に満ちたハルカという自称天使。わからないことだらけで、漠然とした不安が俺に付きまとう。だが不思議なことに、その反面、俺はともうれしい気持ちでいっぱいだった。退院できたことがなぜか、ものすごく素直にうれしいのだ。そりゃあ、二週間も無意味

な検査の毎日だったのだから、うれしいのは当たり前なのだが、理由はそれだけではないような気がする。それが何なのか、今の俺には具体的にはわからないが……。

そんなことを思っているうちに、タクシーは一軒の古びたラーメン屋に停まった。一瞬、ここで昼食をとってから家に帰るのかと思ったが、そうではないことにすぐに気づいた。看板には『ラーメンこみやま』の文字。

「ついたよ」

「えっ?」（ここ?）

母親はタクシー料金を払い、車から降りた。俺もそれに続いた。店の入り口には「本日臨時休業」の紙が貼ってある。

「ここがおまえのうち」

「ここが俺のうち……」（と、言っても亮の家だが）

俺がまるで初めてそこに来たような態度だったので（いや。実際そうなのだが）亮の母親は、記憶を失ってしまった息子を前にして、あらためて戸惑っているのが俺にはよくわかった。

「いいから、中に入って」

母親はぼーっと突っ立っている俺に中に入るように言った。俺は母親に促されるまま、中に入る。

店内はそんなに広くはなく、年季の入ったテーブルにイス、メニューと値段が書かれた紙が貼られた壁、カウンター席とその奥の調理器具などが目に入った。俺はなんだか珍しいものでも見ているような感覚がして、不思議だった。そんな俺に対して、亮の母親は相変わらず、変わって（入れ替わって?）しまった息子に戸惑いを隠せない様子だ。

「亮、おかえり」突然、誰かがそう言った。

声がしたほうを振り向くと、中学生か高校生くらいの年齢だと思わ

れる女の子の姿がそこにあって、驚いた。

（誰こいつ、亮の妹？）

そう思った次の瞬間、何を思ったのか彼女は突然、俺に抱きついてきた。俺が手に持っていた荷物が床に滑り落ちる。

（妹じゃないよな？ 妹だったら、こんなことするわけないだろうし……いや、待て、もしかしたらブラコンの可能性も否めないな）などと、飽くまでも冷静に考えていた。

《清美ちゃんは妹じゃなくて、亮の幼なじみ》

俺の意識にハルカが突然現れてそう言った。

（幼なじみ？）

ただの幼なじみが、いきなり抱きついてきたりするものだろうか。俺は突然、意識の中に現れたハルカのことなんかより、亮の幼なじみという清美という彼女のことのほうが気になった。そんなことを考えているうちに清美という少女は、亮の身体から少し離れ、今度俺の顔を凝視している。その瞳に薄っすらと、涙を浮かべている。俺は突然のことに困惑してしまう。

「ごめん。なんか私……。今日はもう帰るね」

彼女はそれだけ言い残すと、その言葉通りさっさと帰って行ってしまった。俺は何がなんだか訳がわからずに、しばらくその場に立ち尽くしたままだった。

第五話「亮」

清美が帰った後、亮の母親は俺を奥の住居スペースに案内した。どうやらこの家は、一階にラーメン屋の店舗スペースとその奥に住居スペースがあるようだ。

部屋に入って、まず目に入っただのは、仏壇だった。仏壇には亮の父親らしき人物が穏やかに微笑んでいる写真が添えてある。このとき、俺は初めて、亮の父親がもうすでに亡くなっているという事実を知った。

（ということは、亮にはほかに兄弟もいないようだし、母親と二人暮らしなんだな）

そのことに気づいたとき、俺は急にこの家の経済状況が心配になってしまった。入院中、俺は個室だったことを思い出し、しかも無駄に二週間も入院してしまったことを考えると、お金は大丈夫だったのかなどと、余計な心配をしてしまう。

俺が頭の中でそんなことを考えているとは知らない亮の母親は、仏壇の前に座り、仏を拝み始めた。

「お父さんのお陰で、亮がこうして無事にうちに帰って来ることができました」

その光景をまるで傍観者のような気分で見守っていると「ほら、あんたもお父さんにお礼言いなさい」と言われて、俺は黙って仏壇に手を合わせる。

仏壇に飾ってある父親の写真。亮の父親は相変わらず、写真の中で微笑んでいる。きつと、この人にはすべてお見通しのだろう。俺が、彼の息子ではなく、別の誰かであるということも。

そう思うと、なんだか居たたまれない気持ちになった。俺はこれから、『小宮山亮』という人間を演じなければならぬ。

「亮、昼ごはんどうする？ 何か作ろうか？」母親が俺に訊いた。

「いいよ。まだ、後で」

なぜかそんなに腹も減っていない。俺は自分の部屋にでも行こうとして立ち上がると、その直後に、亮の部屋がどこにあるのかなんて知らないことに気づいた。

「あー、俺の部屋って（どこだっけ？）」

二階へと続く階段の前で立ち止まり、母親のほうを向いて、そう言いかける。すると彼女は（あーそうか）というような顔をして「二階の左側の部屋」だと教えてくれた。

俺はそのまま階段を上がり、左側の部屋へと入った。

狭く、こじんまりとした印象が強い。亮の部屋は雑然としていたが、そんなに酷く散らかっているわけでもなかった。というよりむしろ、どちらかといえば、整理整頓されていると言ったほうが正しい。無論、それはきれいにという意味ではなく、雑然と必要なものだけがまとめて並べられている。ただ、それだけのことだった。

亮の部屋を一通り見渡してみても気づいたのは、この部屋にはそんなに物が多くはないということだ。本当に必要な物しか置いていない。そんな感じだ。

亮が使っていたであろう勉強机のいすに座ってみる。消しゴムのかす一つ落ちていない机を見ると、亮は机に向かって勉強をするようなタイプではないことが一目瞭然だ。というより、もうこの机はその役目を果たし終えたのかもしれない。

そんな机の奥に飾ってあった（置いてあった？）一枚の写真が目にとまった。亮の幼いころからの写真は、入院中に母親がアルバムごとわざわざ持ってきてくれたので見たことはあった。結局、何も思い出さなかったのも意味はなかったが、亮が今までどんな人生を送ってきたのか垣間見ることができたのでよかった。しかしこの写真は確か、アルバムには貼ってなかったような気がする。アルバムから不自然に抜き取ったような形跡があったから、その写真がこれなのかもしれない。

その写真は、写真立てに入れられていた家族写真だった。俺はそれを手に取り、じつくりと眺める。

今より少し若いころの亮の母親とまだ元気だったころの亮の父親、そして幼いころの亮の三人が、この家のラーメン屋の前で笑って写っている。この写真を見ると、この幸せそうな家族が俺には羨ましく思えてきて不思議だった。

（なんで羨ましいんだ？　もしかして俺には家族がいなかったとか？）

そんなことをぼんやりと思いながら、写真立てを机の上に戻すと、机の横にあるベッドへと寝転んだ。

あらためて俺は、今、自分が置かれている状況を思い返してみる。よく考えてみれば（いや、よく考えなくても）変な話だ。全く、縁もゆかりもない赤の他人と魂が入れ替わってしまったなんて。……いや、待てよ。全く関係ないこともないのかもしれない。記憶がないだけで、俺は『小宮山亮』となんらかの関わりがある人間なのかもしれない。まあ今の段階では、どちらともいえないが……。

（まあ一人でなんかうだうだ考えてても、埒があかないよな）

そう思って横に寝返りを打つと、あるものが目に入った。亮の携帯電話だ。なぜか無造作にベッドの上に置いてある。

そうだ。今の俺には情報が足りない。自分のことはともかく、亮のこともほとんど何も知らないのだ。亮の携帯を見れば交友関係とかいろいろわかるかもしれない。すかさず、俺は亮の携帯に手を伸ばしていた。

第六話「学校」

（亮って、まだ高校生だったんだな）

制服にそでを通しながら、そんなことをしみじみと実感していた。

昨日、夕食時に亮の母親から「明日から学校行ってみる？」と訊かれたときは、何のことだか理解するのに数秒かった。いくら記憶喪失だからといって、まさか自分の年齢までも忘れ去っているだなんて、誰も思わないだろう。しかし、俺の場合はそのまさかだ。俺は自分自身の年齢さえも忘れ去っており、もちろん亮の年齢なんか知る由もなかったのだ。（というか気にもしなかった）亮の姿を鏡で見たときから、亮は若いだろうなとは思っていた。だが、せいぜい十九、二十歳そこそこだろうななどと考えていたので、母親が「学校」という言葉を口にしたとき、大学や専門学校のほうを思い浮かべてしまった。

次の瞬間「もうすぐ卒業ってこともあるけど、学校に行けば何か思い出せるかもしれないでしょう」と、母親。

その言葉を聴いて、俺は（それもそうだな）と思い、退院早々、さっそく学校へ行くことに決めたのだ。さすがに制服が用意されているのを見たときは驚きが隠せなかったが……。昨日、亮の携帯を見ようとしたが、ロックされていて、結局、中身を見ることができなかった。依然として『小宮山亮』という人間に関する情報も少ないままなのだ。本当に母親の言うとおり、亮が通っていた学校に行けば、何か掴めるかもしれないという、淡い期待があった。

（それにしてもネクタイって、どうやって結ぶんだっただけ？）

俺は亮の部屋にある姿見の前で、必死にネクタイと格闘していた。俺自身も亮もネクタイぐらい締めたことがあるはずなのに、なぜか要領がよくわからない。ちょうどそのとき、下から「清美ちゃんが

迎えに来てるわよ」という母親の声が聞こえてきた。

登校の支度をなんとかすませると、一階に降りていき、住居スペースから店内へと出る。するとそこには、昨日のあの清美という少女が俺を待ち構えていた。店内の椅子に腰掛け、時計を気にしている。

俺の存在に気づいた彼女は「ちょっと亮、遅いよ。早くしないと遅刻しちゃうでしょ」と言っ、昨日は何事もなかったかのような明るい態度で接してきた。

「ああ、ごめん。なんか久しぶりだからいろいろ手こずっちゃって……」

ネクタイに手こずったなんて、なんかカッコ悪くて言えない。そんな俺を知ってか知らずか、「なんかネクタイゆるくない？」などと言っ、清美がネクタイを締めなおしてくれた。

このとき初めて俺は、清美の顔を間近でよく見たような気がする。昨日は突然の事態で、放心状態だったからだ。

清美の顔が近い。高校生にしては、まだ少しあどけないというか、童顔だ。身長もそんなに高くはないだろう。それにしても、シャンプーのいい香りがする。

（どうして女って、こんないい匂いのするシャンプー使ってるんだろう？）

どうでもいい素朴な疑問が頭に浮かんだ。そんなことを思っていると、清美はネクタイを結び終えて、こう言っ。

「どーせ、学校までの道も忘れちゃってるだろうから、私が連れててあげるね」

俺の目を見ずに言ったのが少し気になったが、口調が明るかったので、それ以上は気にしないことにした。

「ホント、早く行かないと遅刻しちゃうから」

そう言っ、清美は俺の腕をぐいっ、と引っ張っ、外に出た。

「おばちゃん、行ってきます」

彼女の明るい声が店内に響く。俺も清美に続いて控えめながらも、
「いっ、行ってきます」と、言っておいた。
亮の母親は、笑顔で俺と清美を見送ってくれた。

第七話「登校」

学校までの道のりを並んで歩き出した俺と清美。

清美は俺に一方的に話しかけてきた。何もかも忘れてしまった亮（俺）に対して、学校のことなどをいろいろ教えてくれた。

清美の話によると、亮や清美が通う高校は前期後期の二期制なので、冬休みが終わった次の日である初日の今日から、いきなり授業が一日中あるとのことだった。それを聞いた俺は（初日から授業六時間はさすがにちょっときついなあ）と、少し憂鬱になった。

そんなことよりもさらに俺を憂鬱にしたのは『小宮山亮』としての学校生活だ。何を今さらって感じだが、着実に一步一步、学校へと向かっていることを考えると、不安は増した。

自分は全く相手のことを知らないのに、相手は自分のことを知っているという、変な状況になることが目に見えている。今朝、家を出るときまでは、なんとかなるだろうと軽いノリだったが、今になって緊張してきているのが自分でもわかった。

「亮？」

「えっ」

突然、名前を呼ばれて清美のほうを向く。

「ちょっとさっきから全然、人の話聞いてなかったでしょ？」

「ああ、ごめん」

思えば清美は、ずっとさっきから一人で俺に話しかけていたような気がする。だけど俺は、そんな清美の話に適当に相づちをうつただけだった。

そうこうしてる間に学校へと着いてしまっていた。家から歩いて十五分程度の距離だろうか。もっと遠いのかと思っていたが、意外にもかなり近かった。途中にある商店街を抜けるとすぐにその高校

はあった。

学校に到着すると、俺は清美に案内されて職員室へと向かった。まるで転校生のような気分になっている俺は、期待と不安が入り乱れる複雑な心境で、職員室へと足を踏み入れる。

先に入っていった清美が「永瀬先生」と、ある教師に声をかけた。どうやらこの人が亮の担任らしい。

「あー、小宮山くん。元気そうじゃない」

彼女は俺の顔を見るなり、そう言った。

「話はお母さんから聞いたわ。大変だったみたいね。いろいろと」

「ええ、まあ……」

『永瀬先生』は、まだ二十代だろうか。そんなに年がいつているようには見えないなどと、どうでもいいことを考えた。

「覚えてないって、ほんと？」

「……はい」

「そう。クラスのみんなには一応、このことは知らせておく必要があるから、朝のホームルームで言うつもりだけどいい？」

「はい。それは言っというてもらわないと困るんで……」

「うん、そうよね。じゃあ、いろいろこれから大変だと思うけど、気楽に頑張ってね」

明らかな作り笑顔を浮かべながら彼女はそう言い終えると、今度は清美に俺を教室まで案内するようにと促した。

教室に着くと清美は、「亮の席は窓際の一番後ろから二番目だから」と言い残し、自分はさっさと教室へと入って行ってしまった。一緒に教室に入るのが嫌だったのか何なのか知らないが、このとき初めて、清美が同じクラスだということに気づいた。

一人廊下に取り残された俺は、教室に入るタイミングを逃してしまったようだ。朝のHRが始まる時刻が迫っているせいか、もうすでに教室にはクラスメイトのほとんどがそろっているはずだ。な

んだか入りづらい……。。

第八話「教室」(前書き)

更新遅くてすみません。

第八話「教室」

やはり、いざ教室に入ろうとすると、心成しか足がすくむ。

『3年1組』と書かれたプレートに目を向けた俺は、いよいよだなと思う反面、高鳴る心臓の音をなんとか静めようと、密かに必死になっていた。教室の中からは、楽しそうな話し声や笑い声なんか聞こえてくる。冬休み明け初日の今日は久しぶりの学校で、会話もよく弾んでいるのだろうか？

なんだか今度は（不登校だった人が勇気を出して教室の前まで来てみたが、躊躇している）みたいな状況に近いかもしれない……なと思う。

俺は、ゆっくり目を閉じてみる。そして自分に「大丈夫だ」と言い聞かせる。教室から聞こえてくる楽しそうな笑い声。あの中についこの間まで、俺は……いや亮は、居たんだろうか。俺は、『小宮山亮』として、このクラスに受け入れられるのだろうか？

そのときだった。誰かが急いでこっちに向かって来ている足音と「遅刻、遅刻」という声が耳に入った。気がつく俺は、廊下に倒れこんでいた。

一瞬、何が起きたのかわからなかったが「遅刻、遅刻」と言いながらこっちに向かって来ていた男子生徒とぶつかってしまったらしい。

「いててて……もう何なんだよ。おまえ。廊下の真ん中につたって……」

相手が俺の顔を確認する。

「……こ、こみゃん」

『こみゃん』というのは亮のあだ名なのだろうか？ 彼は、俺が亮だとわかると「おまえ、もう大丈夫なのか」と訊いてきた。

「うん。まあ、身体のはうはな」とだけ、俺は答えた。

「そっか……」

たったそれだけ、曇ったような顔で小さく呟くと、彼は何事もなかったかのように教室の入り口までゆっくりと歩いていった。

その様子を見る限り、こいつは亮の今の状態を知っているのだと思った。まだ、学校では公にされていないはずだから、普通は知らないはずである。だが、知っているとなると、この彼は亮の仲のいい友人の一人である可能性が高い。たぶん、清美が彼に話したのだろう。ほかに思い当たる節もないので、俺は勝手にそうなんだろうと思いついた。

「おまえ、教室に入らないのか？」

教室の入り口の前で立ち止まり、こっちを向いて怪訝そうに彼が言った。

ちょうどそのとき、朝のホームルームを告げるチャイムが鳴った。慌ただしく席につくクラスメイトたちの様子が廊下にいてもわかった。

ここにきて教室に入らないわけにもいかなないので、俺はとりあえず教室に入り、自分の席を探す。

（たしか窓際が一番後ろから二番目だって、言ってたよな）

清美が言っていた通り、その席は空いていた。座ろうとする前に、ふと後ろの席のやつが気になった。そいつは黒髪でおしゃれなメガネを掛けていて、ひとりで読書に耽っている。なぜだかそいつのことを俺は少し気になったが、もうホームルームが始まるようなので、とりあえず自分の席についた。

休み時間になると、俺のほうに近づいてくるやつがいた。

まず最初にやってきたのは、廊下に突っ立ってた俺にいきなりぶつかってきたあいだった。こいつの名は武田潤也っていうらしい。

「たぶん覚えてないだろうから」とわざわざ一言付け加えてから、彼は俺にあらためて自己紹介した。武田潤也だから『たけじゅん』

と呼んでほしいらしいのだが、ほかのクラスメイトによると実際には、誰も彼のことをそのあだ名では呼ばないらしい。ちなみに亮も『こみやん』とは呼ばれていない。武田が勝手にひとりでそう呼んでるっただけのようだ。

ほかのクラスメイトたちも最初は俺に興味津々というか、関心があったようだが、みんなもう大人なので、俺のことを気遣ってそっとしておいてくれたので助かった。正直な話、俺は実際に『小宮山亮』という人間に会ったことがないので、どういう風に振舞えばいいのかわからないのである。話しかけられても結局、愛想笑いを浮かべながら、曖昧な受け答えをするに留まった。

相変わらず、後ろの席のおしゃれメガネはひとりで読書に耽っていた。俺はそんな彼がなんとなく気になってはいたが、まだ最初の一日目なのでとりあえず様子見だ。

冬休みが終わってすぐなのだから、集会とかあってもよさそうなのになぜだかそういうのは一切ないらしい。本当に一日ぶっ続けで授業だ。でもまあ、この学校は進学校でもなんでもなく、どちらかといえば偏差値が低いようなので、勉強内容は比較的簡単に思えた。(……てか、俺って年いくつだ?)

そんなに亮と変わらないくらいなんだろうか。高校生やってるのもそんなに違和感ないし。いくらなんでもオヤジでも小学生くらいのがキでもなさそうだ。

そんなことを考えていると、黒板の前に居る数学教師が俺のことを指名してきた。

「おい。出席番号八番は誰だ? 居ないのか?」

誰も何も言わないので、その教師は名簿を見て確認する。

「小宮山、出席番号八番、小宮山亮」

(って、俺が出席番号八番かよ。てか、なんで八番が指名されてんだよ。日にちで当てるとしたら、今日一月九日だぞ。全然、関係ねえ……もしかして昨日が八日だから?)

などと考えていたら、時計の秒針がちょうど時計を見た瞬間に八秒だったという、なんとも理不尽な理由で当てられたことが教師の口から語られた。そんな指名の仕方があっていいのかと、俺は思ったが、クラスメイトの反応を見ると、どうやらこいつはいつもこんな感じの当て方をするようだ。

仕方なく、黒板に書いてある問題を解いてやろうと席を立ち上がる。すると清美が数学教師に向かって発言した。

「あの。先生、小宮山くんは冬休みのあいだに事故に遭って、まだ本調子じゃないんです。今日はほかの人にしてもらえませんか？」
数学教師はそれを聞いて、すぐに俺のほうを見た。

「そっか。おまえか。記憶喪失になったっていうのは。そりゃほかのやつでも、もちろんいいけど、この問題解けるやつなんかどうせ居ないんだろ？」

おまえらバカにはどうせ解けない。そんな風にこいつは言っている。もしかしたらこの数学教師はいつもこんなかもしれない。こんな風にいつも生徒をいじめるのが日課のような最悪なやつなのかもしれない。そういえばこの授業だけ、ほかの授業のときは雰囲気が違うと思った。特に武田なんかは、ほかの授業のときはうるさいぐらいに喋るのに、この授業のときだけはやけに大人しくしていた。

「高橋。おまえが代わりに解いてやれよ」

誰かが高橋に向かってそう言った。皆が一斉に窓際の一番後ろに座っているおしゃれメガネに注目する。このとき初めて俺は、このおしゃれメガネが『高橋』という名前なのだと知った。

「そうだよ、よっしー。このクラスにはおまえしか居ないんだからな」

それまで大人しくしていた武田が高橋に向かって言った。

（どうでもいいが『よっしー』って、なんだよ。これも武田用のあだ名か？ ていうか、これは言っちゃいけないけど、『おまえしか居ない』って、高橋以外はみんなバカってことなのか？）

「無理だよ。いくらなんでも。だってその問題、超難関校の入試問

題でしょ？」

と、高橋は言った。

「そうは言ってもこれは中学の復習だぞ。これくらい解けたっておかしくはないだろ？ おまえらもうすぐ、高校卒業なんだからな」
「そう言い放った後に「ああ、それはまだわからないか」と、付け加えたので俺は余計に腹が立った。たぶん、ここにいるクラスメイトのほとんどが俺と同じ気持ちになったと思う。」

この教師は、明らかに生徒いじめをしている。大学の入試問題ならわかるが、なぜに今さら高校の入試問題を解かなければならないのだろうか。はっきり言って、意味不明だ。

「あの、先生。俺、たぶんどきますよ。この問題」

それよりもっと不明なことは、俺はなぜかこの問題を解けるような気がしていることだ。みんなは、俺のなぜだか自信満々な発言に困惑した表情を浮かべている。

「おい。こみやん、何、はったりかましてんだよ。おまえに解けるわけじゃないじゃん」

「でも、なんか、できなくもないかなって……？」

「できなくもないじゃないかって、できるわけないから！」

武田が俺に激しく突っ込んだが、俺はそれを無視して教壇に上がって問題を解き始めた。

第九話「不吉な予感」

今日という一日がいつもより長く感じられたのは気のせいだろうか。なんとか『小宮山亮』としての学校生活一日目が終わろうとしている。まだ帰りのホームルームがあるが、そんなのすぐに終わるはずだ。というか、もうさっさと終わってほしい。俺はもう早く家に帰りたくて仕方がない。やっぱり慣れない環境っていうのは、その場所にいるだけで十分疲れる。俺の場合、家もまだ慣れない環境の一つだが、ここよりはだいぶましである。

それにしても、クラスメイトたちは俺のことを不審に思ったに違いない。なぜなら、俺はあの問題をスラスラ解いてしまったからである。しかもなぜか正解していた。あの数学教師を筆頭にクラスメイトを啞然とさせてしまったのだ。

特に後ろの席のおしゃれメガネ高橋は、俺に訝しがった視線を一日中、向けていた。おかげで俺は余計、気疲れしてしまった。

ほかのみんなには、適当に「山根（＝数学教師の名。俺もさっき知った）のやつが答え落としたのを偶然拾った」とか、なんとか言っておまかした。武田あたりは「あーそうだな。そういうことだろうと思ったよー」みたいな感じで、納得してくれたようだったが、高橋や清美あたりは、なんだか釈然としない様子だった。

そうこうしてる間にあたりは少し薄暗くなってきた。カラスが「アホーアホー」と鳴いていた。俺は机に肘をついてぼんやりと外を眺めていると、その中の一羽のカラスが突然、変な声で鳴いた。（確か、カラスが変な声で鳴くときって、誰かが死ぬんじゃないかなかったけ？）

そんなことが、ふと脳裏をかすったが、俺は大して気にもせず、そのままの体勢で空のほうをただぼんやりと眺め続けていた。

すると向こう側の校舎の屋上に人影があるような気がした。薄暗

くて距離もあるのでよく見えないが、俺はなんとか目を凝らして見ると、それは明らかに人に見えた。

脳裏に不吉な二文字が浮かぶ。

『自殺？』

その瞬間、俺の目の前にハルカが現れた。正確に言えば、前ではなくて後ろに現れたのだが、彼女は『自殺？』と声を発したので、俺がすぐに後ろを振り向くと、あのハルカが存在していた。もうその存在自体、忘れかけていたハルカが目の前に居るのである。当たり前だが、俺はとりあえず、驚いていた。

そんな俺の目の前で、驚いた顔をしているやつがもう一人いる。武田だ。彼の席は真ん中の列の後ろから二番目。つまり、俺の席の隣の隣になるわけだが、なぜだか彼は何かを「あっ、あっ」と、指差しながら驚いている。

（こいつまさか、ハルカが見えるのか？）

とっさに俺はそう思ったが、すぐに屋上の人影を指しているのだとわかった。

「人。誰か人があんなところに！？」

武田の一言でクラスメイトたちが一斉に、彼が指差している屋上のほうに注目する。

「ほんとだあ。誰か居るよ。屋上に」

屋上の人影に気がついたクラスメイトたちは、何やらざわつき始め、すぐに教室全体が騒然とした雰囲気へと変化した。窓際に近づき、向こう側の校舎に居る人物が誰なのか確かめようとする。

「あれ、誰だよ？」

「こっからじゃ、誰なのかわかんねーよ」

クラスメイトたちはこの緊急事態を半ば面白がっているのかいないのか、よくわからないがとにかく口々に何か発言して、騒ぎ立てている。

そのときだった。この状況にも動じず、一人で読書に耽っていたあの男が口を開いた。

「あいつ、三組の杉本じゃねえの？」

教室にいる誰もが、彼のほうに注目する。

「杉本？ 杉本って、あの陸上部の？」

誰か知らないが、男子生徒の一人がそう言った。

そのとき俺は、透かさず高橋に心の中で突っ込んでしまっていた。

（おしやれメガネ、そのメガネはもしかしてダテメガネか！？）

肉眼でもよくわからないのに、この男の目にはしっかりと『スギモト』という人物が見えているのか？ 否か？ ……それにしても武田もあんなに窓から離れてるのに、よく屋上の人影が見えたものだ。どうでもいいが、この二人の視力はどれほどいいんだろうかと、『スギモト』という人物のことよりも、このときはそのことばかり気になってしまって仕方がなかった。

俺がそんな風に思っている間にも、相変わらずクラスメイトたちはざわついている。それを見るに見兼ねた担任の永瀬が「静かに！」と言って、みんなを自分の席に着くように促した。

クラスメイトたちはしぶしぶ自分の席へと戻る。それに対して俺はなぜだかわからないが、このとき自分の席に着くことをしなかった。俺はしばらくその場に立ち尽くすと、なぜか突然俺の前に現れたハルカと屋上にいる『スギモト』という人物のほうを交互に見つめていた。そんな俺に、担任の永瀬が席に座るように言ったと思う。でも俺はなぜだか、永瀬の言う通りにはしなかった。これは自身意志なのかどうかさえわからないまま、居ても立ってもいられなくなった俺は、廊下へと一人駆け出していた。

第十話「自殺騒動」

「ちょっと、小宮山くん!!」

担任の永瀬が俺に向かって叫んでいる。だが、そんなことは気にも留めずに、俺は無我夢中でどこかに向かっていた。

なぜ俺は今、廊下を走っているのだろうか、ふと疑問を持つ。

俺の隣には、自分のことを天使だとか言い張っているハルカの姿が、確かにある。ハルカと目が合った俺は、『もしかしてこれは、コイツ（ハルカ）の意志なのだろうか?』と、考える。

「おまえ、屋上に行く道順知ってるよな?」

『えっ?』

ハルカは俺の突然の質問にきよとした顔を見せた。こいつが亮に取り憑いていたんなら、当然そういうことを知っていても何ら不思議ではない。

（どうせこの行動もおまえのせいなんだろう?）俺はハルカを横目にそんなことを思った。

「……なんでいきなりまた現れたのか知らねーけど、面倒ゴトはマジ勘弁だからな」

（ていうか、俺を巻き込むな……）

そのとき、ふと後ろを振り返ると、清美や武田、そしてなぜか高橋までもが俺を追ってきていた。……清美と武田は、まあわかるけど、なぜにおしゃれメガネさえもが追ってきているのか、意味不明だ。

屋上へと続く階段を一目散に駆け上がる。俺は少しも迷うことなく、屋上へと向かってひたすら走っている。相変わらず、あの三人も追ってくる。

もうじき屋上に着くというときに、武田が突然こんな発言をした。

「あつ、やべえ。俺、高所恐怖症なの忘れてた」

（――はあ?　じゃあ、ついてくんなよ!!）

俺は心の中では激しく突っ込んだが、こいつはたぶんそういうキャ

うなので、あえて口に出しては何も言わない。そのまま無視して、階段を上がっていく。すると、もう屋上の入り口のところまで来ていた。

勢いよく、屋上のドアを開く。真冬の風がさすがに冷たい。

そこにはおそらくこの学校の男子生徒だと思われるヤツが一人いた。そいつは特に何をするわけでもなく、ただぼーっと、屋上の柵のところに寄りかかって一人で空を見上げているように見える。そんな彼と、俺は目が合ってしまった。

「何してんの？」

そう訊いてきたのは俺ではなく、そいつのほうだった。

「えっ？ 何って？ ……何してんだろ……？」

自分で自分の行動が理解できないのだから仕方ない。俺は笑ってごまかすしかなかった。

すると突然、後ろから誰かの声がした。

「杉本……おまえ、こんなところにいたのか」

その声の主は、俺の存在なんか無視するかのように横をすりぬけ、

『杉本』のところに近づいていった。彼はおそらく、杉本の担任か何かだろうと思った。

どうやらこの屋上にいる人物は高橋が言っていたとおり、『杉本』というヤツに間違いないようだ。

「どうしたんだよ、杉本。急にいなくなったりして、先生探したぞ」杉本の担任か何かだと思われる男性教師は、穏やかな口調でそう言った。まるで腫れ物に触るような態度で、杉本に接しているような感じがするのは気のせいだろうか。

「先生、こないで。これ以上俺に近づいたら、こっから飛び降りるから」

杉本は驚くほど冷静にそう言い放った。男性教師の足が止まる。

そのとき、ふと横に目をやると俺の隣には、清美と高橋。それにハルカがいた。同時に男性教師がこちらを振り向き、俺たちの存在に気づいたようだ。彼は「君たちはもう帰りなさい」と、静かに言

った。

「そうだね。亮、もう帰ろうよ。私たちには関係ないんだし」

横にいた清美が急かすようにそう言ったが、俺はなぜだか、まだここにいないければならないような気がしていた。相変わず、これが俺自身の意志なのか何なのかわけがわからないが……。

（ハルカ。おまえもしかして、俺のこと操ってる？）

ハルカは何も答えない。

（あれっ？　テレパシーみたいな感じで、心で会話できなかったっけ？）

まあいいや。そんなことはどーでも。

「……なんで俺についてきたの？」

突然、俺は清美に話しかけた。

「え？　なんでって、亮が突然、教室飛び出していったら……」

「そうだな。なんで俺、ここまで走ってきちゃったんだろうね？」

「？」

清美と高橋は、怪訝そうな顔を浮かべていた。ハルカは何を考えているのか全く見当もつかない。ただ、そこにいるだけだ。

依然として、その場から立ち去る気配のない俺たち三人（本当は四人？）に対して、男性教師はついにしびれを切らしたかのように、こっちに向かってくる。

「早く家に帰りなさい。君たちには関係ないだろ？　心配しなくても先生がちゃんと彼を説得して家に帰すから」

真顔でそう言って彼は、また杉本のほうに歩み寄っていく。でも俺たち三人は、一向にその場から少しも動かないままだ。俺と俺のことが心配な清美はともかく、高橋がここにいる理由が未だによくわからないが――。

「早く帰りなさいって、何度言ったらわかるんだ!!」

男性教師は、少し歩いたところでこちらを振り向いたかと思うと、突然、怒鳴り声をあげた。

「先生。別に帰らなくてもいいじゃん。こいつらたぶん、人が死ぬところを生で見たんだよ」

先生の後ろでそう言ったのは、もちろん杉本だ。相変わらず、妙に冷静だ。

「何、言っただよ!? なぜ突然、そんなこと言い出すんだ?」

この教師は杉本のほうに振り向き、困惑している様子で彼に訴えた。

「突然、人生が嫌になったんです。理由はそれだけです」

「理由になってない! ちゃんと先生にわかるように説明しろ!!」

「じゃなきゃ、先生は絶対に納得しないからな」

（おいおい。どんな理由でも納得しちゃダメだろ）

「……世の中って、不公平だと思いませんか?」

（はあ? いきなり何、言い出したの? コイツ）

杉本は、自分なりの理由を述べはじめた。

「俺にはもう、生きている意味がなくなっただけです。これから先、ただズルズル生きてても俺にはもう、生きる価値がない」

そう言い終えると、彼は柵をよじ登り、柵の向こう側に立った。

「おまえ、陸上ができない身体になったからなのか? そんなことを突然言い出したのはそのせいなのか?」

杉本は、教師の問いに答えない。

「確かにそのせいで大学の推薦がダメになってしまったかもしれない。でもな、人生これからまだずっと長いんだ。陸上ができなくなっただけは残念だが、人生はそれだけじゃない。また、別の楽しみをいくらかでも見つければいい」

「気休めなんか言わないでください。もう、決めたんです」

（決めたって、死ぬって? そんな簡単に決めんなよ）

「俺は本気です。今からここから飛び降りて死ぬから」

（——バ、バカだ。コイツ。正真正銘、最悪のアホだな。そんな理由だけでは、さすがにこの先生も納得いかないだろうな。まあ、こいつにとっては、陸上がすべてみたいなのがあったんだろうけど）

たぶんこいつは挫折というものを今まで一度も味わったことがないのだろう。全く、いい迷惑だ。「死にたいのなら、勝手に一人で死んでくれ」と、言いたいところだが、そんなセリフ、口が裂けても言っではいけないという空気が流れている。

「すんなり思い通りにいっちゃう人生のほうに逆に怖いけどね」

突然、俺の口から自然に出たセリフがそれだった。思わず、杉本と男性教師が俺のほうを振り返る。その二人は（おまえ、まだいたのか？）的な目で俺を見ているような気がしたが、俺はそんなことは気にもせず、勝手に話を進めた。

「別に陸上なんかできなくても、死ぬわけじゃないんだからいいじゃん」

「!？」

その場にいた人間の顔が皆、引きつるのがわかった。

「お、おまえなんか何がわかるんだよ！ てか、おまえ誰だよ？」

「三年一組出席番号八番、小宮山亮」

俺は亮になってから、初めて人に自己紹介した。てか、この状況、客観的にちょっとウケるような気がしなくてもないな……。

「確かに俺におまえの気持ちなんかわかんねーけど、そう言うおまえにだって俺の気持ちなんかわかるはずないよ」

「……？ ど、どーいう意味だよ」

杉本は、俺が（正確には亮が）交通事故に遭って記憶喪失ってことを知らないようだ。まあ、別にそのことは関係ないからどうでもいいんだけど。

「さっきその先生が言ったことはさ、俺は正しいと思うよ。長い人生の途中で何かをやむおえず、諦めないといけないときってあるんだよ。きつと」

「諦めなくちゃいけないこと？」

杉本が俺に訊き返し、そのあと続けてこう訊いてきた。

「まるで自分が実体験したみたいない方するんだな。小宮山くん

は何かを諦めたことがあるの？」

その言葉を聞いたとき。俺はハッとした。杉本の言うとおりであった。俺は何かを諦めて生きてきた……？のだろうか。わからない。今は。そんなことは知らない。憶えてない――。

「たとえばの話だよ。自分の力じゃどうにもならないことがさ、世の中にはあるんだ」……と、俺は思うよ。

たぶん人はそれを運命と呼びたがる。

「ハハハ。なんかもう、バカらしくなってきたよ。死ぬとか生きるとか、どーでもいいよ」

何を思ったのか、杉本は突然笑い出し、そして、柵を再びよじ登るところから側に戻ってきた。

「なんかよくわかんないけどさ、この彼が必死に説得してくれてるみたいだし。元々俺、本気じゃなかったから」

(は?)

「じゃ、俺もう遅いし、家帰るわ」

(は?)

「先生、ゴメンネ。なんか突然変なこと言い出しちゃって」

「いや、別に。それならいいんだが……」

突如、気が変わった杉本にその場にいた誰もが啞然とした。

(だいたい、こいつの心変わりした理由がわかんねーよ!!)

「小宮山くん……だっけ？」

杉本は俺のほうを振り向いて言った。

「なんか君があまりにも真剣だったから、逆にこっちがシラケてきちゃって……」

笑いながらそう言うコイツの顔を俺はまともに見ることができなかった。なんかこっちが恥ずかしい。

(真剣って、おまえマジじゃなかったのかよ！ 本気だって言ってただろーが!!)

「……でも、君が言うこともほんとにそうなのかもしれないね」
「え？」

「自分の力じゃどうにもできないことって、あるんだよね。やっぱ俺、諦めきれなくてさ、いろいろ。男らしくなかったよな」

（はあ……）

「俺、君のおかげで踏ん切りついたから」

「素晴らしい残すと、彼は何事もなかったかのようにその場を去っていた。」

第十一話「母と幼なじみ」

「ホント俺、いつになったらこの生活から抜け出せるんだろ？」

俺は湯船に浸かりながら独り言を呟いた。

ハルカは、すりガラスに背を向けて脱衣所の床に黙って座りこんでいる。……のかと思ったら、いちいち俺の独り言に絡んでくる。

『そんなこと言って、まだ始まったばかりでしょ？ 君まだ手がかりになるようなこと何にも思い出してないみたいだし』

「そんなこと言ったって、しょうがねーだろ。俺だって、思い出せるもんなら早く、全部思い出したいよ……」

今の状況は、正直言って居心地が悪い。自分がどこの誰なのか全く見当もつかないまま、赤の他人の身体で、その人物として生活を送るはめになってしまった。おまけに学校生活一日目からさっそく変な騒動に巻き込まれるし……。

それにハルカの存在も相変わらず意味不明だ。天使だと言い張ってはいるが、本当のところはどうだかわからない。ハルカの背中をすりガラス越しに見つめるが、やはり羽など生えてはいない。

（突然現れたり、消えたり……。いったい何なんだ？ コイツは？）

放課後の自殺騒動以来、ハルカの姿は俺に見えっぱなしだ。理由はわからない。謎だ。すべてが謎に包まれている。

学校からの帰り道も俺と清美の後ろをずつついて（憑いて？）くるので、気になりすぎて清美と会話をするどころではなかった。

俺はしばらくひとりで考え込むと、不意に言葉を発した。

「それに……」

『それに、何？』

ハルカが怪訝そうに訊き返す。

「それに……俺、考えたんだけど、亮の母親と清美になんか申し訳ないっていうか。なんか……騙してるみたいだろ？」

しつこいが俺は『小宮山亮』ではないのだ――。一瞬、それを聞い

てハルカは何か考え込んだ様子だったが、すぐに『でもそれは、君のせいじゃないから仕方ないよ』と、言っただけを励ましてくれた。

全く。天使だか幽霊だかのくせに、そういうところがやけに人間っぽい。どちらにしろ、過去にはコイツもどこかで普通に生きていた人間なのだろうなと、俺は、ふと思った。

それにしても、前にもそんな感じのセリフ誰かに言われたような気が……する……？

風呂から上がり、タオルで髪をふきながら居間の横を通り過ぎようとする。母親と清美は二人でテレビを見ているようだ。ふすま越しにCMの音が流れてくる。

「ねえ、おばちゃん？」

「んっ？」

「最近、亮、ちょっと変だよね？」

廊下を歩いていた俺は、その発言に思わず足を止める。

「……うん。そうね。あの子、ちょっと変よね」

ふすまに耳を近づけてそのセリフを聞いていた俺は、思いがけず薄いリアクションをとった亮の母親に驚いた。清美ももしかしたら、俺と同じだったかもしれない。

しばらくして、また清美の声が聞こえてきた。

「おばちゃん。今日ね、亮が全然知らない人みたいだった。記憶が無くなってから、亮は私の知ってる亮じゃなくなっちゃったみたい……」

ポツリと言ったその言葉は、清美の本心なのだろうか。

俺は今日一日、『小宮山亮』として不自然な行動が多々あったのかもしれない。それに清美は気づいたのだ。俺の知らない、事故に遭う前の亮をよく知っている清美には、それは不自然極まりないことだったに違いない。

「もし、このまま記憶が戻らなかったら、ずっとああなのかな？」

「清美ちゃん。それはないわよ。記憶が戻っても戻らなくても、亮

は亮だもの」

「おばちゃんは亮の記憶が戻らなくても平気なの？」

「……平気なわけないわよ。だけど、命があっただけでもありがたいと思わないとね」

その言葉に俺はハッとした。

亮の母親は、もしあのときの事故で亮が死んでしまっていたとしたなら、独りきりになってしまう。亮が事故に遭って、二日も意識が戻らなくて、どれだけ心配したのだろうか。それに、どんなに心細かったことか……。

俺は『小宮山亮』として目覚めたときのことを思い出していた。

あるとき、何度も何度も「よかった」と、涙ぐんで言った彼女の顔が今も頭から離れない。

「俺、ばかだったな」

『えっ？』

静かに独り言を呟くと、俺は階段を上っていった。

自分の部屋に戻り、ドアを閉め終わるとため息をついた。そのまま少しうなだれた姿勢になると、俺は声には出さずに心の声でハルカに訴えていた。

（なんか自分のことしか頭になかったな。亮の母親も清美もすっぴーっくらいはずなのに。いつになったら自分の身体に戻れるんだろうとか、そればっかし。最低だな。俺）

ハルカは黙っていた。そのあと何も言わなかった。

俺は思った。

俺は『小宮山亮』であり続ける以上、もう二度と亮の母親を悲しませるようなことをしてはいけないのだ、と。もちろん清美に対してもそうだ。もう、この二人にこれ以上、心配をかけるわけにはいかない。

自分の正体が誰なのかなんて、今はどうでもいい。俺は母親と清美のためにも亮として、毎日を過ごしていくしかなさそうだ。結果的に嘘をついていることになるのかもしれないが……。

第十二話「謝罪」(前書き)

だいぶ間があきましたが、作中の季節はまだ冬です。

第十二話「謝罪」

「ただいま」

次の日、学校を終えて帰宅してみると、相変わらず店は何人か客が来てただけで、お世辞でも繁盛しているとは言えない様子だった。この家に来て、数日が経ったが、俺は未だこの店が客で賑わっているのを見たことがない。この店は大丈夫なのだろうか、少し心配になる。でも俺が知らないだけで、これが普通なのかもしれない。

「ちょっと亮。なんかあんたに会って話があるって、美人の女の人
が来てるのよ。奥の部屋に通したから」

家に帰るなり、いきなり母親が興奮した様子で言ってきたので、俺は何のことだかさっぱりわからなかったが、とにかくその美人の女の人とやらに会ってみることにした。

奥の部屋に行く途中。

（もしかしたら何か変なセールスとかじゃないだろうか？）などと思っ
た。亮の母親もなんかいかにも人がよさそうな感じだから、そ
ういうのにまんまと引っかかりそうだ。

その女性は、仏壇に手を合わせている最中だった。肩より少し長
い巻き髪で品のよさそうな出で立ち。

俺は思わず、その人の後姿に見とれてしまった。すると彼女は俺
の気配に気づいたのか、こっちを振り向いた。そして俺の顔を見る
なり、いきなり手について謝った。

「あの……。ごめんなさい。私のせいで事故に遭ってしまって、私、
なんてお詫びしたらいいか……」

突然のことに驚く、俺。全く、話がみえない。

「あの、すいません。私のせいって、どういう意味ですか？」

「本当に何も憶えてないんですね。私、あなたに助けられたんです」
「助けた？ 俺（亮）がですか？」

そういえば、ハルカが前にそんなことを言っていたような気がする。
「ええ、実はあのとき、私、死のうとしたんです。つい、魔が差し
てしまつて……」

「死のうとした……？」

彼女の思いがけない突然の告白に、俺は耳を疑った。というよりも、
なぜそんなことをいきなり、俺なんかに話すのか理解不能だ。

「あつ、でも今はあなたに助けてもらつて、本当に感謝してるん
です。もう、あんなバカな真似はしないって、神様にだって誓える……
でもあなたが私をかばったせいで、私の代わりに事故に遭つて、
記憶喪失になつてしまったというのを聞いて、あなたに会つてちゃ
んと謝らないとつて思つて、それでここに来たんです」

「そうですか……」

「それで私、許してもらえないかもしれないけど、これは心からの
謝罪の気持ちです」

そう言つて彼女が差し出したのは、お金が入っているであろう封筒
だった。俺は彼女のほうへ近づき、机の上に差し出された封筒の中
を確認する。中には、おそらく今まで目にしたことがないであろう
大量の札束が入っていた。開ける前からやけに分厚いことは一目瞭
然だったが、本当にそれがお金だとわかると少し引いている自分が
いた。

「何ですか？ これ」

これはもしかして、慰謝料つてことなのか？

「慰謝料のつもりです。ごめんなさい私、こんなことしかできなく
て」

そう言つて、また頭を下げる彼女を見ると、俺はなんだか白々
しい気持ちでいっぱいになった。

このあいだの杉本といい、この人といい、俺には全く、彼らの気
持ちや行動が理解できないのだ。

「あの、俺、こういうこと頼んだ覚えはないですから」
俺は彼女に、封筒を返した。

「えっ、でもそれじゃあ、私の気が修まらないから……」
それでも懲りずに、彼女は封筒を差し出そうとする。

「俺、こういうことしてもらってもうれしくもないですから。今日のところはそれ持って、帰ってもらってもいいですか？」
彼女の顔が、みるみる沈んでいくのがわかった。

「本当に、迷惑なだけですから……」

「そうですね。ごめんなさい。私、勝手な真似ばかりして」
そう言いながら彼女はスツと立ち上がり、返された封筒を自分のバックにしまうと、俺にはもう目もくれずに黙ってその場を去っていた。

「お邪魔しました」という声が聞こえてきた。たぶん、母親に言ったんだろう。

今日も清美は、亮の家で夕食を取ることにしたらしい。それは別に特別なことではなく、ほとんど毎日のことだった。

清美の家は両親が共働きで、二人とも帰りが遅いことが多く、しかも清美はひとりっこで家に帰っても誰もいない。そのため、うちの店でバイトしてついでに夕食までご馳走になって帰る。それが、ほとんど毎日の日課のようだった。

「ねえ、今日夕方バイトしにここに来たときに、入れ違いに出て行った女の人がいたんだけど、なんかあの人泣いてなかった？」

俺は焼き焼きを食べながら聞いていて、少し動揺してむせてしまった。

「あーもー亮、大丈夫？」

「はい。お茶お茶」

母親に差し出されたお茶を飲むと落ち着いた。

「何？ あの人、泣いてたの？」

「なんかあの人、ただ事じゃないって感じだったけど……もしかし

て、亮が泣かせちゃったの？」

清美は少し上目づかいで、俺に疑いのまなざしを向けてきた。

「ちよつとあんた。女を泣かすなんて、男がすることじゃないよ。最低だよ」と、母親が言った。なぜかもう、俺があの人を泣かせたことが前提になっている。

「それであの人、亮に何の用だったの？」

清美が俺に訊いた。

「なんか俺が事故ったときにほんとあの人事故りそうになって、俺がそれを助けたんで、お礼っていうか、謝りにきたみたいで……」

「それで、なんであの人泣いたの？ あんた何か言ったの？」

母親は亮の顔をまじまじと見つめながら訊く。

「いや……」

「いや、何？」と、二人。

『……』ハルカも俺の顔をじっと見ている。

「いや、なんでもない」と、俺は言った。

（はあ？）という顔をする二人。俺はそんな二人（三人？）のことはお構いなしに、黙々と飯を口に入れた。

「何でもないことないでしょ？ あの子、泣いてたんだよ」

心優しい我が息子が、女の子を泣かせたりするはずがない。もしそうだとしたら、何か理由があるはずだ。といった面持ちで、亮の母親はしつこく俺にセマツた。

確かに亮だったら、女を泣かすようなことはしないと思う。けど俺は違うんだ。しつこいようだけど俺は『小宮山亮』ではない、ほかの人間なんだから……な。それに、あれは彼女が勝手に泣いて帰ったってだけの話だ。俺が泣かしたってわけじゃない。

一瞬、お金を渡されそうになったことを話そうかとも思ったが、それは言わないほうがいいような気がした。

俺がそのまま何も言わずに黙っていると、

「おばちゃん。もういいじゃん。この話は……ほら、このすき焼

きおいしいよね」

と、清美は笑って視線をこっちにちらつかせながら言った。

第十三話「前進」

早朝。まだ薄暗い中、俺は目覚ましの音で起き上がる。本当はこんな時間に起きたくはない。でも俺は、ほかにどんな方法がいいのかわからないから、とりあえず階段を下りていった。

俺は一昨日の母親の一言が、あれからずっと気になっていたのだ。『生きてさえいれば必ず前に進める』という一言が。

そこで自分なりに考えた結果、店の手伝いから始めてみようと思った。今の俺にできるのは、それくらいしかないような気がするし、変な話だけど、この家にただ置いてもらうわけにもいけないと思った。とにかく、こうなったら俺が亮としての生活に慣れなければいけないとも思ったのだ。

厨房では、亮の母親と従業員の川嶋さんが、仕込み作業に追われている。ひょっこりそこに顔を出してみる。

「ちょっと亮、あんた何？　こんなに早く起きてきたりして……」

母親は俺（亮）の顔を見るなり、怪訝そうに言った。

「あ、いや、なんか手伝えることとかないかなーなんて……思っ」

「何、言ってるの？　そんなのあるわけないでしょ」

そのあとすぐに「邪魔だから、まだ寝てればいいのに」と付け加えられ、全く相手にもされない。

仕方なくしぶしぶ2階の部屋に戻ったが、俺の決意はその後もう変わらなかった。

「店の手伝いとか、してみたいんだけど……」

「……」

相変わらず俺が店を手伝うのに反対なのか、母親は黙って掃除の手を休めようとはしなかった。もしかしたら、事故に遭った亮のことを心配しているのかもしれないと思い、

「ほら、もう身体のほうはピンピンしてるし。全然、大丈夫だから」と、明るく言ってみた。すると母は、こっちのほうに視線を移し、

「あんた、店手伝うのは構わないけど、高校最後のテスト赤点取らないでね。ちゃんと卒業だけはしてくれないと、お母さん困るから」と、一応OKしてくれた。

「テスト？」

「そう。あるでしょ？ 学年末のテストが」

（そっか。そんなのがあるのか）などと思いながら、時計に目をやると家を出る時間が少し過ぎていた。

「あつ、やっべ。もうこんな時間だ」

俺は「行ってきます」と言い残し、清美の家に向かった。

清美と通学路を歩いていると、どこからか急に声がした。

『それにしてもいい考えだね。お店を手伝うの。何か君の手がかりもつかめそうだよね』

ハルカだ。俺は、またうつかりコイツの存在を忘れてしまっていた。いつも突然現れるから心臓に悪い。

『また私のこと忘れてたでしょ？ 話しかけても聞こえてなかったみたいだし』

（え？ おまえ、俺に話しかけてたのか。全然、気づかなかった）
もしかして、俺はハルカのことを意識していないと、姿も見えないし、声も聞こえない。今のうちに心で会話することなんてできない、ということなんだろうか。

『私と君は、今、一心同体なんだから君が考えてること、私には何でもわかつちゃうんだからね』

（えっ、そうなの？）

それは初耳だ。それにしても一心同体って、気持ち悪いな。この身体自体、他人のものだということを考えると、余計、気持ち悪いというか、変な感覚だ。俺とハルカの今の状態は、“一心同体”というより、“一身同体”というほうが、近いのかもしれないが……。

（ていうか、おまえ一心同体ってことは、いつも風呂とか着替えとか見てんのか？ 変態だな）

『ば、ばか？ 何、言ってるの。見てないよ。そういうときは、いつも部屋の外に居るんだから』

そんな会話を脳内で繰り返しているとは知らない清美が、ときどき俺に何か話しかけてきた。でも俺は、相づちを打つことぐらいしかできなかった。ハルカとの会話に集中していたからだ。

『ラーメン屋さんって、出前とかするんでしょ？ だったら君自身とつながりのある人と出会えて、君自身の記憶がよみがえる可能性もあるんじゃない？』

（そうか。その可能性もないとは言えないよな。でも、俺がこの町に住んでいる、もしくは住んでいた、っていう根拠はないんだし。そんな運良く、俺の知り合い（？）に会えるとは思えないけど……）

『もう会ってるのかもしれないね』
（えっ？）

『ほら、世間って意外に狭いから』

（そうか。俺が気がついていないだけで、そういうことももしかしたらありえるのか。……いや、待てよ。だとすると、俺が気づかないどころか、相手も俺に気づかないんじゃない……）

そう考えを張り巡らしながら歩いていると、いつもの商店街に差し掛かっていた。

『恵まれない世界の子供達に救いの手を』と掲げられたスローガンを持った、変な数人の若者の姿が目に入った。朝っぱらから、こんな寂れた商店街で募金活動を行っているなんて、見るからに胡散臭い。俺は一言「ああいうのは、詐欺の可能性もあるから気をつけろよ」と、清美に注意して、その場を通り過ぎた。

一瞬、清美がハッとしたような、驚いたような変な顔をしたのだが、このときの俺は、そんなことを微塵も気にしなかった。

校門の近くまでくると、武田がちょうど向こうから歩いてきているのが見えた。その少し後ろに高橋もいる。

「おお、こみやんと今井ちゃん。おはよう」

武田が俺と清美に向って、声を掛けてきた。”今井”というのは、清美の名字だ。

「ああ、おはよ。偶然だね。武田くんが遅刻しないで学校来るのって、珍し〜」

清美が顔に笑みを浮かべながら、武田と言葉を交わす。

「もうすぐ、卒業だしな。残り少ない高校生活をきちんと過ごそうと思って……って、その言い方じゃ、俺がいつも遅刻してるみたいじゃんか」

「してるでしょ？ 実際」

清美は楽しそうに笑っている。

「武田、おまえ卒業できるかどうか心配になってきたんだろ？」

突然、武田の後ろから現れたのは、高橋だ。手には参考書らしきものが握られている。

「なんだよ。よっしーいきなり。てか、なんでそんなもの広げてるの？」

「は？ もうすぐ期末だろ。俺は勉強なんかしなくても大丈夫だけど、武田、お前はまたどうせ赤点なんだろうな」

それだけ言い残すと、高橋は昇降口まで一人で歩き出していた。

「『勉強しなくても』って、してるじゃん。あいつ、矛盾してるよな？」

俺が少し笑いながらそう言うと、武田が呆れ顔で「そういうやつなんだよ」と、付け加えた。

「それにしてもよっしーって、変な奴だよな」

靴箱に靴を押し込んでいると、武田が首をかしげながら言った。

「変って、何が？」

「何って、あいつ聞いた話によると、医者の子らしいぜ。なんでこんな底辺校にきてんだよ。わけわかんねーって、思わねえ？」

「へえ、あいつ医者の子なんだ」

なんとなく、そんな雰囲気ではあるな。確かに。

靴を履き替えると、俺と武田は教室に向かう。ちなみに清美は、先に友達らしき女子と教室に行ってしまった。武田は、歩きながら話を続ける。

「しかも医者の子供ってだけでも、気に食わねえってのに、口も性格も悪いしな。俺達以外に絶対、友達いねえぞ」

武田は『絶対』という言葉強調した。

俺達以外に友達がいないということは、少なくとも武田と亮は、高橋と友達らしい。自殺騒動のときに、なぜ高橋までもが俺についてくるんだろうかと、疑問だったのだが、そういうことならとりあえず納得がいく。でも、待てよ。亮は、ともかく、武田のような性格の奴が、高橋のようなタイプの人間と積極的に関わろうとするなんて考えにくい。

「じゃあ、なんでおまえや俺は、あいつと友達になったんだよ？」俺は素朴な疑問を武田にぶつけた。

「はあ？ それはおまえが、あいつにしつこく話しかけて仲良くなったんだろ」

お互いに顔を見合わせると、武田は何か大事なことを急に思い出したような顔で、その場に立ち止まり「ごめん」と、小さく呟いた。

「俺、おまえが記憶失くしてるってこと、今すっかり忘れてて……」

「いいよ。別に。事実だし。おまえが気にしてどうすんだよ」

そう言って、俺は笑ってみせた。

教室に入ると、友達らしき女子と話していた清美と、一瞬だけ目が合った。だけど俺は、特に何も気にもせず亮の席に着く。

担任が数分後に教室に入ってくると、朝のホームルームが始まった。

『ねえ？ 聞こえてる？』

ハルカの声がした。

（何だよ。聞こえてるよ）

『君、気づいてないようだから言っとくけど、清美ちゃん君のこと、

不思議に思ってるよ』

（おまえはいつから俺以外の人の気持ちを読めるようになったんだ？ 最初からか？）

『もう、違う。違う。そうじゃなくてさあ、募金だよ。募金。君のあの態度、言動、亮くんだったら、絶対にありえないよ』
募金だと？

（ああ、俺が清美に「気をつけろ」って、言ったこと？）

『うん。そう。清美ちゃんは、きっと今、君のこと、ものすごく混乱してると思う』

そんなことを後から言われても、今さらどうにもできないんだが……。

ふと視線を清美のほうに向けると、彼女はやはり何か神妙な面持ちで考え込んでいるように見える。

（やばい。俺のこと疑ってる？）

第十四話「彼女」

放課後。俺は傘をさして、小雨がぱらつきはじめた通学路を歩いている。空は厚い雲に覆われたまま、暗くなりはじめていた。

『君さあ、ちゃんと亮くんっぽく、振舞わなきゃダメじゃん。周りの人に変に思われたら君だって困るでしょう？』

今日は清美が友達と帰り道、どこかに寄って帰るなんて言うものだから、俺は一人で帰るはめになったのだ。変なのが取り憑いているせいで、一人で帰っている気が全然しないのだが。

（あのなあ。そんなことあとから言うくらいなら、その場で注意しろよ）

『できないよ。だって、君、私のことを意識してないとき声聞こえてないんだもん』

（じゃあ、なんで最初会ったときとか、おまえの姿が見えたんだよ？ あのとときだって……。変じゃん？俺、おまえのことなんか、あのととき意識したつもりないんだけど。完全に忘れてたし）

その後、ハルカは何も言っていなかった。

（なんだ。おまえにもわからないのか）

家に帰ると、俺に客が来ていた。

昨日、なぜか泣きながら帰っていったあの人だった。

「どうぞ」

お茶を出しながら、俺は彼女の様子を窺う。相変わらず、高そうな服に高そうなアクセサリを身に着けている。そんな彼女は、昨日あんな大金を持ってきたことも含めて考えると、どこかえらい会社の社長令嬢って、感じか？

それにしても、この人がまたここにやってくるなんて思わなかった。今日は何の用があってここに来たのだろう。まだ、あの事故のことを気にしているのだろうか。

「あの一……」

一向に彼女が話し出す気配がないので、俺が恐る恐る「事故のことですか？」と、言いかけると……。

「昨日は、本当にごめんなさい」

また彼女は、俺に向かって頭を下げた。

「いや、そんな、俺のほうこそなんかエラソーに言っちゃって」

俺がそう言うと、彼女は顔を上げ、こう話を続けた。

「私。昨日いきなり飛び出して行っちゃって、驚いたでしょう？」

「ええ、まあ」

「あれ別に怒ったりしたわけじゃあないんです」

「えっ、ほんとに？」

「まあ、多少はそれもあるんだけど。よく考えてみたら、あなた何一つ間違ったこと言っていないし」

「はあ……」

「それに、きっとアイツも私のこと、あなたと同じようなこと言っ
て叱ると思うから」

「……………」

なんだか彼女は自分だけの世界に行ってしまったているようなので、しばらく返す言葉がみつからなかった。

「あの、それで今日は、わざわざそれだけを言いに来たんですか？」

「いえ、違うんです。それもあるんですけど……私、あの後いろいろ考えたんです。あなたには、本当にお世話になりましたし」

「いや、お世話なんてとんでもない！」

（ホントにとんでもねーよ。俺、実際何にもやってないし）

見に覚えがないことで人に感謝されるなんて気持ちのいいことではないなど、俺は思った。逆の場合よりましだろうが、どっちにしろ
気味が悪い。

「……ですから、私をここで働かせてください」

（は？ 突然、何言い出したの？ この人）

突然すぎて、彼女の言った意味が一瞬わからなかった。驚いて彼女

を見ると、とても真剣な目をしている。

「私、何でもします。償いたいんです。あなたの記憶が元に戻るお手伝いなら、なんでもしたいんです。お願いします」

頭を下げ続ける彼女を見ながら、ふと思った。

（店で働くことと俺（亮）の記憶が戻ることと何の関係が？）

そんなことは、とりあえずどうでもいいことなのかもしれないとすぐに思いなおし……。

「あのさ、そういうのはうちの親に言ってくれなきゃ。俺、ただの高校生のここの息子ってだけだから……」

少し笑いながらそう言うと、彼女は妙に納得しながら「あっ、そうか。そうですよね」と、言って顔をほころばせた。

（ホント、そーだよ）

俺は、亮の母親を呼びに行こうと席を立つと、何か忘れているような気になった。

（そういえば、この人の名前何だっけ？）

「あなたのお名前何でしたっけ？」

俺の言葉に彼女はハッとした様子で、自分の名前を言った。

俺はそれまで自分が彼女の名前を忘れていただけだろうと思っていたのだが、よく考えてみると確かに彼女の名前を聞いたのは今のが初めてだった。なぜかそのことも彼女は謝り、俺はそんな彼女に呆れ果てると同時に、なぜかその様子がほほえましく思えてしかなかった。

「石本紗弥香といいます。昨日も今日も突然お邪魔しちゃってすみません」

彼女は……紗弥香さんは、亮の母親にそう挨拶した。

「あー、いいのよ。別に。それより、あなたうちで働きたいって本当なの？」

母親が笑顔で彼女に話しかけながら、俺の座っている横に腰をおろ

す。

「はい。私、事故のときに助けていただいて、何か私にできることはないかな？ って、考えたんです。それでここで働かせてもらえないでしょうか？」

遠慮がちな様子でそこまで言い終えると、彼女は自分のバックから何かを取り出し、母親に渡した。亮の母親は、それをまじまじと見つめる。

「あら、あなた音大生なのね。ピアノ科？　すごいわねえ」
母親はうっとりした様子で何やら感心している。母親が見ている紙は、どうやら履歴書のようなのだ。

「将来はピアニストにでもなるつもりなの？」
顔に笑みを浮かべながら、母親が彼女へ質問する。母親は何気なくそう訊いたんだろうが、当の本人は「ええ、まあ」と、浮かない顔をして気のないような返事をしただけだった。

そして話は本題に入る。

「それで、あなたアルバイトの経験は？」

「いえ、それが……一度もないんですけど、駄目ですか？」

彼女は心配そうな表情で、亮の母親を見つめている。

「いや、駄目じゃないわ。OKよ。採用しましょう」

満面の笑みで母親は、そう答えた。

第十五話「香り」 (前書き)

お久しぶりです。

第十五話「香り」

俺は紗弥香さんをバイトに雇ったことに納得がいていない。どう考えても人手は足りていると思うのだが……。いったい、亮の母親は何を考えて彼女を採用したんだろうか。見るからにお嬢様育ちで、世間知らずそうに見える紗弥香さんが、うちみたいなラーメン屋で働く姿が俺には全く想像できないのだが……。

あれから二人の間で勝手に話が進み、紗弥香さんには、さっそく明日から働いてもらうことになったらしい。そして、亮の母親はよっぽど彼女のことを気に入ったのか、彼女をその日の夕飯にまで誘った。

「お口にあうかどうかかわからないけど……」

なんて、お約束のセリフを口にする母親。紗弥香さんの隣に座っている清美は、なぜか浮かない様子で心ここにあらずといった感じだ。「清美ちゃん。紗弥香さんったらすごいよ。音大のピアノ科なんですって」

（おいおい。母さん。そこで清美に話ふるわけ？）

そんなことを心でツツコミながら、清美のほうに視線を移す。

「……え？ ああ、ピアノ科？ へえ、すごいですね。音大のピアノ科なんて……将来の夢はピアニストなんですか？」

それまでぼーっとしていた清美は、母親の言葉で我に返り、少し笑みを浮かべながら紗弥香さんに質問した。

「ええ、まあ」

しかし、また彼女は、さっき亮の母親に訊かれたときと同じセリフを返しただけだった。

（もしかして、このことにはあまり触れてほしくないのか？）

俺は何か別の話題に切り替えなければと思い、とっさに

「いや、それにしても育ちが いいと、食べ方までなんか上品な感じですよ？」

などと、意味不明なことを口が勝手に言っていた。

すると彼女は、箸を休めてこう言った。

「君も箸使い、とても上手ね」と。

夕食の後片付けを手伝い終わると「それじゃあ、お邪魔しました」と言って、紗弥香さんは一人で家に帰るつもりでいたらしい。

「ちょっと、紗弥香さん。もう遅いし、うちの亮が駅まで送っていくから」

慌てて亮の母が彼女を呼び止める。

こうして、俺が彼女を駅まで送っていくことになった。

一歩外に出ると、雪が少しちらついていた。いつの間にか小雨が雪へと変わったようだ。

(どうりで寒いわけだ)

妙に納得しながら傘を広げる。彼女にも傘を差し出す。

二人並んで歩き出すと、彼女が言った。

「今年のクリスマス、雪降らなかったね」

それは何気ない一言だった。

「え？ ああ、そうなんですか」

俺の妙なリアクションに彼女はすぐにハツとして

「あつ、ゴメン。私、ついうつかりしてて……」

手に持っている傘と一緒に、顔を下に傾けるのがわかった。

「いえ、全然気にしてないからいいですよ」

彼女に変な気を遣わせないためにも俺は笑う必要があった。

その後しばらく、気まずいような沈黙が二人の間に流れた。遅い時間だということもあるのか、寒いからなのか、街は人通りもまばらで彼女を一人で帰さなくて正解だったな、と思った。

「私ね。今年のクリスマスに雪が降って、ホワイトクリスマスになったら奇跡が起きるような気がしてたんだ……」

沈黙を先に破ったのは彼女のほうだった。

「奇跡……ですか？」

突然、何を言い出したのかと思って、紗弥香の顔を見る。彼女は俺のほうに顔を向けずに、ただ前を向いたまま、歩きながら話を続ける。

「うん。奇跡なんか起きるはずなのに。バカだよ。私」

彼女はまるで独り言のように呟きながら、笑った。俺には、さっきから何の話をしているのか全く見当がつかなかったが、特に深く考えずに彼女の歩くスピードにあわせていた。

そうこうしてる間に、駅に着いていた。

「今日はどうもありがとう。明日からもまたよろしくね」

笑顔で紗弥香はそう言う。「傘は明日返すから」と、付け加えて駅の中に歩き出した。

俺は元来た道を数歩進んだところで、後ろから聞こえた彼女の声に呼び止められる。

「おやすみなさい」

一際大きな声だった。それが俺に向けられたものだすぐにわかった。驚いて後ろを振り返ると、駅の中に歩いていったはずの彼女が十数メートル後ろにこっちを向いて立っていた。彼女の表情が、今にも泣き出しそうに見えるのは気のせいだろうか？

俺は、そんな彼女の様子がちよつと気になったが、少し笑って「おやすみなさい」と、挨拶を返した。

また前に向き直り、再び歩き出そうとした。そのときだった――。

彼女は何を思ったのか、俺のほうに走って近づいてくる。さしていた傘が宙に舞う。そして、俺に抱きついてきたかと思うと、胸に顔をうずめて泣いていた。

俺は突然のことに激しく動揺する。一瞬、直立不動のまま啞然と

していたが、すぐに我に返り彼女を問いました。

「ちょ、ちょっと紗弥香さん？ どうしたんですか。いきなり？」
「ただ彼女は、俺の質問には答えない。」

「ちょっとだけ。あと三十秒だけ。このまままでお願い」

（え？　なんで三十秒？）

心の中で彼女のセリフに突っ込みつつ、周囲の人目を

気にしながらも彼女の言うとおりで、そのままじっとしていた。

何があったのかなんて知らないけど、彼女にも彼女なりの事情つものがあるんだろうと思い、それで彼女の気が済むのなら、別に悪い気はしなかった。紗弥香のつけている香水の香りが鼻につく。ふと、それが前にどこかで嗅いだことがあるような気がして驚く。何か、大事なことを思い出せそうで思い出せない。もどかしい。

「ごめん。いきなり変なことして。びっくりしたでしょ？　本当に

ごめんね。亮くん」

そう言って彼女は、ゆっくり亮の姿をした俺から離れると、ぱつが悪そうな顔をし、駆け足でその場を去っていった。

一人になった俺は、自宅への道をとぼとぼと歩きながら、さっき何かを思い出せそうだった自分にあらためて驚いていた。

（香水？　なんで俺、香水のことなんか……）

『亮』という名前を呼ばれて、違和感を感じたのもこれが最初だった。

第十五話「香り」(後書き)

実は、これだいぶ前に書いたものです。

そして、ここまでが今まで下書きを書いておいた部分です。

これから、いろいろ忙しくなるのでなかなか更新しないと思います
が、いつか続き書くつもりなので期待せずに気長に待っていてくだ
さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9877a/>

僕と天使とアイツと彼女

2010年10月11日04時19分発行